《書　　評》

Sarah B. Pomeroy, *The Murder of Regilla: A Case of Domestic Violence in Antiquity*

Harvard University Press, Cambridge, MA, 2007. Pp. xii, 249.

桑　山　由　文

ヘロデス＝アッティコスは，2世紀のローマ帝国におけるギリシア文化隆盛の中心的存在，いわゆる第2ソフィストの代表的人物として名高い。ところがフィロストラトスが語るところでは，このヘロデスは，無罪放免となりはしたものの，妊娠八ヶ月の妻レギッラを殺害したとして，彼女の弟の元老院議員ブラドゥアによってローマで訴えられたことがあった。本書はこの事件を手がかりとして，レギッラとその生涯を論じ，ローマ期ギリシアの女性の在り様を考察したもので，構成は以下の通りである。

Introduction
1 Girlhood in Rome
2 A Roman Matron in Imperial Athens
3 Public Life
4 Death in Athens and Murder Trial in Rome
5 Regilla's Final Resting Place

叙述はレギッラの生涯を追っていく形で進む。第1章は，彼女がローマ市でどのような少女時代を過ごしたのかを扱う。とはいえ，このころの彼女に言及する史料は存在しないため，著者 Pomeroy は当時のローマ女性の様々な例をレギッラにも当てはめるとの立場を明示した上で，彼女の少女時代を再構成していく。アテナイ出身元老院議員であるヘロデスと婚約を経て結婚したこと，長男が生まれるも死別し，その後アテナイへと出立するまでを描く。

第2章では，アテナイでの新生活および，彼女を待ち受けていたヘロデス家の詳細を述べ，同族結婚（endogamy）のギリシア社会と，異族結婚（exogamy）のローマ社会との落差が，どのようにヘロデスの家の内部に反映し，それがレギッラの結婚生活にいかなる影を落としていたのかを考察する。とくに Pomeroy はヘロデスに里子や養子が複数いたことに注目し，彼らはヘロデスと単なる義理の親子関係にあっただけでなく，第2ソフィスト独特の古典期回帰的価値観から見られるべきこと，すなわちヘロデスと同性愛関係にあり，レ

ギッラは夫の愛が他の人間，それも男性に向けられることに苦しめられたことを強調する。それに加えて，里子たちが家の中で強い立場を持っていた一方，古典期への憧れを持ったヘロデスによって，レギッラは古典期アテナイの女性のようにふるまうこと，つまり，家の中に生活の場を制限されることを強いられたであろうと推測する。Pomeroy の論点は，ローマ女性がそれまでの環境とまったく違うところに放り込まれ，孤立無援の状況に置かれていたことを示すことにある。

第3章では，家の外のギリシアに目を向ける。レギッラの活動の痕跡が，夫と同じく，ギリシア本土のさまざまなポリスで窺えることを描き出す。オリュンピアにおいてはニュンファエウムを奉献し，デメテル神崇拝の神官であったこと，アテナイにおいてはテュケ女神の神官を務め，コリントスではペイレネの泉を施与し，ブーレによって顕彰されたことなど，彼女がギリシア本土社会において果たしていた役割を詳細に示していく。これらの分析を通じて，Pomeroy は，レギッラの名が刻まれている奉献物ですら，従来は無条件にヘロデスの奉献に帰されていたことを指摘し，実際はこうした活動には両者の共同作業的性格が強く，むしろレギッラ自身が親から継承した自身の財産を積極的に使用して施与行為をおこなったらしいことをも明らかにしていく。

第4章では，150年代末と考えられるレギッラの死と，その数年後に生じた，彼女の弟ブラドゥアの訴えによる元老院でのヘロデス裁判を扱う。ただし，後述する問題から，本章はその内容が書名となっているにもかかわらず，他のどの章よりも頁数が少ない。Pomeroy は裁判の一連の過程を叙述した後，ヘロデスは本来有罪判決を受けるはずであったのに，少年時代の師である彼を敬愛するマルクス帝が露骨な介入をしたために無罪となったのであり，ブラドゥアは皇帝の機嫌を損ねて失脚したのだと断ずる。そして，結局のところ得をしたのはヘロデスの解放奴隷で犯罪の下手人であったアルキメドンであり，彼はヘロデス家内部での自身の権力確立に障害となるローマ女性の排除に成功したのだと主張する。

第5章では，アテナイで発見されたヘロデスとその子供たちの墓，および，ローマ近郊のレギッラの地所を取り上げる。レギッラの死後，ヘロデスがこれらの建築物を用いて悲嘆にくれる夫を自己演出し，妻殺しの後ろめたさを取り除こうとしたのはもちろんのこと，その背後により大きな打算を持っていたことを示す。すなわちヘロデスは，レギッラを一種の「半神」として表象し，また同時に，ピウス帝の妻で死後神格化されたファウスティナと近親であることを示唆することで，夫である自分の権威を増す手段としたのであると。レギッラは死後もヘロデスに利用され続けたのである。

このように，Pomeroy は，ヘロデスではなくその妻レギッラを主題とすることで，ソフィストの家の実態を浮き彫りにしようと試み，さらに元首政期ローマ帝国におけるローマ女性とギリシア男性の結婚という，支配＝被支配の逆転の構図が，どのような意味を有したのかを検討していく。彼女自身の言葉を借りれば，これは「ethnicity, gender, class の相互作用を考察するに適切な題材」ということになる。2世紀のローマ帝国におけるギリシア文化隆盛，

すなわちギリシア・ルネサンスの研究は，従来，思潮分析を中心としており，ソフィスト自身の社会的背景に目を向けたものは少ない。もちろん，ソフィストの妻に目を向け，その生涯を一貫して追ったものは皆無である。古代ギリシア女性史研究で多数の論考を著し，プルタルコス『モラリア』の注釈書の編者でもあるPomeroyならではの視点といえよう。そのことが本書を，従来のギリシア・ルネサンス研究とは異なる斬新なものとしている。

ところが，これらの長所をPomeroyが充分に活用しているとは言いがたい。その要因はひとえに彼女が，ヘロデスによるレギッラ殺害を自明の理としている点にある。ローマでのヘロデス裁判については，フィロストラトスのみが『ソフィスト列伝』にて伝えるのであるが，彼はヘロデスを無罪とする[1)]。ヘロデス研究の先駆けであるP. Graindorの著書から，近年ヘロデスとアテネ市との関係を詳細に論じたJ. Tobinの浩瀚な著作にいたるまで，現代の研究者たちは，古代においてすでにヘロデスの潔白を疑う声があったことは認めつつも，真相は「藪の中」という点で一致している[2)]。そこで，読者は本書の題名や登場人物紹介といったミステリ仕立ての体裁から，レギッラの死についてのPomeroy独自の推理を期待するわけであるが，彼女は，何の躊躇も議論もなくヘロデスを「真犯人」と決めつけてしまう。彼女が主張するところでは，レギッラ死後にヘロデスが建築物や碑文にて過剰に彼女を悼んだこと自体が，真犯人のやましさの証明なのである。レギッラが胎盤剥離などの問題で死亡し，それが反ヘロデスの立場の人々によって政治的に利用された可能性などは最初から無視し，先行研究と異なる認識を取る理由にすら触れない。この大きな欠陥ゆえに，最も言葉を尽くして論じるべき第4章は，事態の平板な叙述に終始してしまっている。

さらに，死に至るまでの人生においても，レギッラの「不遇」は議論の大前提となっている。前述のニュンファエウムはレギッラとヘロデスの共同作業であり，少なくとも当初は円満な夫婦関係が存在した証拠と見なしうるし，マラトンにあるヘロデスとレギッラの所領の境界線に建てられた「永遠の調和の門」も，字義通り解釈すれば夫婦の良好な関係を記念したものであるが，これらはPomeroyにとってはただの欺瞞でしかない。結局，Pomeroyの目的は，レギッラという，本来「活発」で「幸福」でありえたはずのローマ女性が，女性の行動を制限するギリシア社会の中で抑圧されて悲劇的最期を迎え，死後ですら都合よく夫に利用されたという点を示すことにある。レギッラは絶対的に「哀れな妻」「ドメスティック・ヴァイオレンスの犠牲者」なのである。

しかしながら実のところ，レギッラが奉献した建築物や，彼女に言及する碑文はそれなりの点数に上るにもかかわらず，彼女の具体的な人となりを伝えるようなものではない[3)]。そこでPomeroyは，古典期回帰的価値観の持ち主ヘロデスがいかに夫として独善的であるかを描き出し，その犠牲者であるローマ妻としてレギッラ像を再構成しようとする。すなわち，彼女の導き出すレギッラ像は，従来と同じくヘロデス像に規定されたままなのであり，単にヘロデスを負の存在に置き換えたにすぎない。レギッラは，相変わらずヘロデスに付属した存在としての役割を無意識に押し付けられているのである。そのため，本書は，男性主体に

捉えられていたローマ期ギリシア社会を女性主体に解釈し直すことに成功してはいない。これまでの第2ソフィスト研究と本質的には同じといえよう。

では，Pomeroyが前提とするヘロデス像，つまり古典期アテナイを理想化し，その行動様式を模倣することを最優先とするような人物像はどの程度妥当なのか。たしかにフィロストラトスの描くヘロデスは，古典期的価値観の体現者然としたものである。だが，彼は父の代からのローマ元老院議員家系に属し，少年の頃から首都ローマに長く住んでラテン語習得にいそしみ，正規コンスルともなっている。彼が，単純にすべてを古典期風にしようとした，たとえば女性の扱いについて古典期アテナイ人と同じ行動を取ろうとしたと即断はできない。実際，Pomeroy自身，ヘロデスを「純粋な」ギリシア人，ローマ的なものを軽蔑する人物と規定する一方で，彼のローマ的側面に言及してしまっており，矛盾をきたしている。たとえば彼女は第5章では，レギッラの「半神化」をヘロデスのローマ中央における地位上昇の野心と結びつけているし，また，アテナイに現在も残るレギッラ記念音楽堂については，ヘロデスがレギッラへのオマージュとしてローマ風に造ったと述べるが，アクロポリスの麓にローマ風のものを大々的に造り，伝統的景観を破壊するような人物を，単純に古典期に埋没したがっているとみなすことは難しい。

レギッラについても同様である。彼女はローマのパトリキ家系という高い出自ではあるが，そのことは，彼女が伝統的「ローマ人」であることを直接意味しはしない。当時のローマ帝国中央ではギリシア文化の存在感はきわめて大きかった。ギリシア的教養が政治支配層上層にとって必須であっただけでなく，そもそもギリシア文化圏出身元老院議員も従来の政治支配層の中にかなり溶け込んでいっており，ローマ帝国はいわばギリシア＝ローマ帝国へと変容しつつあった。一方，アテナイもハドリアヌス帝期以降，帝国中央の関心が強く向けられ，帝国「文化首都」と化していた。ハドリアヌス帝やマルクス帝のようにエレウシスの秘儀に入信する皇帝も出てきている。レギッラのような皇帝家の遠縁である人間にとって，ギリシア文化やギリシア本土が居心地の悪い異質なものであったと断言することは難しいのである。

したがって，レギッラとヘロデスの結婚，その結果成立した彼らの家の内実は，ギリシア・ローマの狭間で揺れ動く，微妙で複雑なものであった可能性が高く，二項対立的に理解すべきではない。政治支配層においてギリシア・ローマの境界が曖昧となっていた事実をより考慮に入れて分析していく必要がある。主題そのものが魅力的なものであるだけに，レギッラへの過度の感情移入なくヘロデス家の実態を論じていれば，本書は，ローマ帝国支配下のギリシア社会の読み直しを迫る，大変価値の高いものとなっていたであろう。とはいえ少なくとも，新たな領域への糸口を提供したという点で，本書を等閑視することはできない。

註

1）Philostratus, VS, 555-558.

2) P. Graindor, *Un Millitaire antique: Herode Atticus et sa famille*, Cairo, 1930, 30; J. Tobin, *Herodes Attikos and the City of Athens*, Amsterdam, 1997, 83.

3) Tobin, Herodes Attikos, 80.